

第9分科会 交流及び共同学習

テーマ 「心のバリアフリー」の実現に向けた 交流及び共同学習

提案Ⅰ 「コロナ禍における交流学習の実践」

発表者	高知県 香美市立山田小学校	教 諭	溝 淵 真理
司会者	高知県 香南市立野市小学校	教 諭	濱 田 寿美子
助言者	島根県教育庁 特別支援教育課	指導主事	三 浦 睦美

I 実践に当たって

1 地域の概要と本校の特色

香美市は高知県の中央よりやや東側に位置し、農林業が盛んな自然豊かな街である。教育の目指す姿として「郷土を愛し、未来を拓く人づくり」、今後の社会の変化に対応できる「躍動する教育」の創造を目指しており、香美市内にある保幼小中高大各種の学校が連携した学園都市構想の下、平成30年より地域・保護者・学校が一つになって教育を行う「よってたかって教育」を推進している。

本校は香美市の商店街にあり、周辺にJR土佐山田駅や市役所、中央公民館があるなど市の中心地に位置している。全児童は458名で、複数の保育園や幼稚園から児童が入学してくる。全児童のうち20名が特別支援学級に所属しており、通常の学級に所属する児童の中にもきめ細やかな配慮を必要とする児童が多く見られる。

2 特別支援学校に通う児童との交流及び共同学習の歩み

本校は、長年にわたり特別支援学校に通う地域の児童と交流及び共同学習（居住地交流）に取り組んでおり、該当の児童が保護者、学級担任と共に本校へ来校し、交流活動を実施している。

文部科学省の『交流及び共同学習ガイド』によると、交流及び共同学習の意義・目的に「相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、この二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していく必要がある…」と記述されているが、学習までは難しい現状があり、より良い在り方について試行錯誤を続けている。

本発表では、コロナ禍における学校や児童の実態を踏まえた「居住地交流」の取組について報告する。

II 実践内容

1 交流学習を行った全ての学年で共通の実践内容は以下のとおりである。

(1) 該当学年の学級担任と交流先の学級担任が交流について事前に打合せをする。

例年、夏休みに交流先の学級担任と打合せを行っている。

(2) 交流する児童の写真及び学校紹介ビデオを使った事前学習を行う。

2 4年生の実践（通常の学級2クラス67名と特別支援学校児童1名の交流）

(1) 目的

- ① 特別支援学校に通う児童の障がい理解をする。
- ② 特別支援学校に通う児童が多くの同学年児童と関わり、学習することの良さを感じる。

(2) 居住地交流の流れ

- ① あいさつ（学年で）
- ② A組交流授業（外国語）（資料1）
 - A) 名刺作り（アルファベットで）
 - I) 名刺交換
 - U) ゲーム



〈資料1〉

英語で好きなものを伝え合った。



〈資料2〉

- ③ 休憩中の自由交流（資料2）

- ④ B組交流授業（体育）

A) 車いすの操作・使い方の確認

支援学校の教員が操作方法や留意点を説明し、それに合わせて特別支援学校の児童が手本を示した。

I) 車いす体験、車いすリレー（資料3）

U) シットイングバレー（資料4）

本来なら床に座って行うが、椅子に座ることで距離をとったまま試合を行うことができるようにした。また、安全性を考慮して風船を使った。



〈資料3〉

- ⑤ 終わりの会・記念撮影

- ⑥ 事後交流

特別支援学校の児童からお礼の手紙が届いた。4年生の掲示板に貼ると、児童が集まって見ていた。次回の交流を楽しみにする声も聞かれた。



〈資料4〉

(3) 成果と課題

- 1回のみでの交流だったが、特別支援学校の児童も本校の児童も交流学習を楽しんでいた。
- 特別支援学校の児童と教員に車いすについて説明してもらったことと本校の児童も車いす体験をしたことで、障がい理解が進んだ。
- 特別支援学校の児童に再会できた喜びで、距離を縮めて関わってしまう児童が多くいた。児童の心情を考えると、感染防止についての指導に難しさを感じた。

3 3年生の実践（通常の学級3クラス76名と特別支援学校児童2名の交流）

(1) 目的

- ① 特別支援学校に通う児童の学校生活について知る。（人権学習）
- ② 特別支援学校に通う児童が、多くの同学年児童と関わり、学習することの良さを感じる。

(2) 居住地交流の流れ

① 本来の計画

3年担当教員は、夏休みの時点では右記のように計画を立てていた。しかし、新型コロナウイルスの感染状況が悪化していたこと、特別支援学校の児童に基礎疾患があることを考慮し、直接交流から間接交流へと切り替えた。

② 間接交流の実際（資料5）

ア) 特別支援学校より本校へ

特別支援学校からDVDが届いた。内容は、特別支援学校と児童についてクイズ形式で紹介するものだった。それを各クラスで視聴した。DVDを見ている時、本校の児童は「懐かしい。C君とK君や」「山田小と全然違うがやね」など、様々につぶやきながら楽しんで見ていた。



〈資料5 間接交流の様子〉

イ) 本校より特別支援学校へ

本校からも、DVDを送ることにした。内容は、特別支援学校の児童2名へのメッセージと、運動会で踊ったよさこいソーランの動画にした。「二人が喜んでくれるといいな」と、楽しそうにソーランを踊る児童の姿が印象的だった。

ウ) 再び特別支援学校より本校へ（資料6）

特別支援学校の児童から、お礼のメッセージと、石で作られたペーパーウェイトが届いた。メッセージを3年生の共有スペースに貼ると、みんながうれしそうに見ていた。ペーパーウェイトは三つあったので、各クラスの教室で使用した。



〈資料6 メッセージを掲示〉

(3) 成果と課題

- ビデオレターでのやり取りになったが、特別支援学校での過ごし方を丁寧に紹介してもらったことで、よく分かった。児童も興味をもって見ていた。
- 国語科の学習（説明文「パラリンピックが目指すもの」）との関連で、障がい者理解が進んだ。
- 石のペーパーウェイトは、児童にも保護者にも好評だった。
- 来年度ビデオレターのやり取りをするなら、本校の日常も伝え、相互理解を深めたい。

Ⅲ 成果と今後の課題

Ⅰ 成果

- 直接交流をした学年は、少ない交流時間の中で工夫をしながら、楽しい時間

3年生全児童での交流

- ①対面式
- ②よさこいソーラン披露
～片付け・交流タイム～
(10～15分)
- ③質問・〇×クイズコーナー
- ④バルーン
- ⑤記念撮影

を共有することができた。

- 間接交流をした3年生は、国語科の学習と関連付けながら交流をすることができた。送り合ったビデオレターの内容が、次年度の活動につながる内容となった。

2 課題

- ソーシャルディスタンスやマスク等、感染症予防の対策を講じながらの交流計画を立てることに苦慮した。
- 計画していたことが新型コロナウイルスの感染状況により急きょ変更になることがあり、子供たちに見通しをもたせることが難しかった。
- 限られた授業時間の中で、交流学习の目的等を含めた事前学習を行うことが難しかった。「交流して楽しかった」気持ちに加えて、心のバリアフリーにつながる投げ掛けができれば更によかった。
- 間接交流はDVDのやり取りだったが、Zoom など、オンラインでの交流も視野に入れることができればよかった。

〈指導・助言〉

交流及び共同学習においては「共に助け合い支え合って生きていくことを学ぶ」ことが重要である。その実現のためには、組織的で計画的な取組が行われることや、「交流」のみならず、「共同学習」として、教科上に位置付けた各教科等の目標に照らして、どのような資質・能力が身に付いたかを評価していくことも大切である。

本実践では、長年に渡り居住地交流が行われており、学校全体で組織的に取り組む基盤が整備されていることがうかがえる。また、交流活動を通して、自然な関わりや触れ合いを楽しんでいる子供たちの様子が伝わってくる。「共同学習」の視点から、例えば4年生の実践では外国語活動、体育科における資質・能力の「三つの柱」の育成を目指すことで、より意義のある学習となると考える。

交流の「楽しみ」を「心のバリアフリー」や個々の学びへと発展させるためには、まず、教師がこの学習を通し、特に何を学ばせたいのかを整理した上で、目指す子どもの姿を思い描き、その達成のために活動内容を組み立てることが有効であろう。例えば、「相手にとってのバリアを想像し、お互いにとってよりよい関わりについて考える」姿を期待するのであれば、活動内容について子供たちの意見を聞く方法もあり得る。目標が明確であればあるほど、活動の方向性も決定しやすくなるであろう。

コロナ禍にあっても、活動内容の前に「身に付けたい力」を整理し、その実現のための活動を考える手順は同様である。また、活動内容のアイデアを保護者や地域の方々からも募ることで、「心のバリアフリー」を地域ぐるみで推進できる機会とすることも可能かもしれない。「コロナ禍」というバリアを発想の転換によって乗り越えていく柔軟さを、まず教師自身もつことが求められる時代が来ていると言えるだろう。